

雑木林と文化史 (生田緑地を中心に)

吉田三夫*

On the Hardwood Forest and Cultural History

Mituo YOSHIDA

I. はじめに

生田緑地は神奈川県川崎市多摩区にあり、多摩丘陵に属する。生田緑地の大半の林は雑木林である。雑木林は里山とか萌芽再生林とか呼ばれる2次林であり、植物社会学的にはクヌギーコナラ群集と宮脇(1967)によって命名されている。

昭和30年代まで、つまりはガス、灯油などの燃料や有機肥料に薪炭林であるなどの雑木林が取って代わられるまでは、雑木林は人間の生活になくはならない存在であり、ある意味では文化を生んできたものと考えられる。

生田緑地の雑木林は何時頃から雑木林だったのか、その前の植生はどうだったのか、そして、どんな文化を生んできたのか、可能な限り生田緑地を中心に歴史を踏まえて考えてゆきたい。

II. 原植生の破壊

生田緑地の雑木林は2次林であり、代償植生であり、この土地の本来の植生ではない。潜在自然植生はシラカシ群集といわれているが、必ずしも原植生と一致しない。

原植生の破壊は水田稲作の始まりに求められるであろう。縄文時代にも陸稲が考えられるが、たいした森林破壊には繋がらない。只木(1987)によれば、登呂遺跡の水田遺構の畦が崩れないようにするために数千枚のスギ板が使用され、住居、農具などを含めると大量の木材が使用されていたという。この当時すでに製板技術があったことが分かりそこには文化があった訳だが、要は、棚田にも木材は使用されたが、平野部に水田を作る時はかなり大きな土木大事業であった。水田開発こそが、原植生の破壊、代償植生の始まりであったと考えるのは妥当であろう。

稲作があったか否かは、花粉分析及び植物珪酸体を用いたプラント・オパール分析があるが、いづれにせよ、水田稲作を証明するためには、考古学的な遺構が必要であり、それがなければ陸稲と混同してしまう。

それでは川崎では水田の遺構があるのかとなるが、残念ながら発見されていない。しかしながら、お隣の横浜市港北区にニュータウンを造成する際に、約2000年前に、早淵川沿いの谷間にある自然湿地で稲がつけられていたことが、分かったという。水田稲作は最初、このような自然湿地が利用されていたことは、水田を作る労力から

考えると当然である。又、水田を作るための自然破壊、原植生の破壊も考えられる。

水田稲作の日本の発祥地は北九州とか博多とかの説がある。いづれにしても水田文化の発祥は九州ということであるが、その年代も2200年前とか2400年前とかいわれている。年代測定の誤差を考えるとやむを得ないだろう。鈴木(1989)は安田(1974)の花粉分析による「イギリスと日本の森林破壊の地域性の比較」図を引用しているが、これによると、農耕活動を伴う広範な森林破壊は、関東では約1600年前になるが、これは、横浜市港北区の水田年代と、広範な森林活動とあるので、一致しなくても良い。

ともかく、九州に興った水田文化は200年~400年かけて東上北進し、横浜市港北区に約2000年前に伝わったことになり、このことは、横浜市港北区だけではなく、川崎市の谷間にも水田稲作が伝わっていたことが推定される。つまり、川崎市での原植生の破壊の始まりは約2000年前ということが考えられる。

小塚(1976)は川崎市内の矢上川、平瀬川、五反田川、麻生川の流域に水田が弥生時代に開かれ、市内から出土した弥生式土器の中に粘りのあとが印されていることを述べているが、これが水田稲作の粘りであるか否かの証明はなく、この点において、原植生の破壊と連結しない。ちなみに、小塚による弥生式土器の使用開始年代は2200年~2100年前としており、この時期に水田稲作があったとしたら、東上北進に疑問が残る。

川崎市に於ける水田遺構の発見が望まれるところである。

III. 歴史と生田緑地の植生

江戸時代後半になると、生田緑地の植生に関する文献があるが、それまでは今のところみあたらないので歴史から植生を推定してみたい。

生田緑地に15、6個からなる長者穴という横穴古墳がある。上総層群飯室層(約100万年前の海成層で不透水層)に横に4~5m深さの穴をあけ、その奥に柩を納めたものである。この頃になると当然、水田稲作は、生田緑地の回りで行われており、小規模ながらも住人の集落があり、原植生の破壊はあったものと考えられる。

鎌倉時代、生田緑地の頂上の枳形山にはこの地の豪族稲毛三郎重成の出城があった。現在は枳形城址といわれ

* 川崎市青少年科学館

ている。後に北条早雲が陣をしいたり、今川義元が来たりした所でもある。

小塚(1976)は出城の東、南、北の三方は断崖を作るために人力で削ったとしている。調べてみると確かに断崖になっており、鎌倉時代に生田緑地にかなりの土木工事があったことがわかる。当然、植生の変化があったと考えられるが、工事後に植栽したか、赤土(ローム層)のままに放置したかによって植生は代わってくるが、赤土は崩れやすいので、多分、植栽したのだろう。

又、小塚はこの当時、多摩川は多摩丘陵よりを流れていたことを説明しているが、多摩丘陵にはコアジサイなど山地性の植物が生育していることを植物専門家に指摘されており、川と気温の低下を考えると、山地性の植物の存在が頷ける。何れにしても鎌倉時代を問わず、かつては多摩川は現在より多摩丘陵側を流れていたようだ。

IV. 江戸時代初期・中期の植生状況

江戸時代の江戸は人口100万都市であり、世界1の都市であった。それまでの水田稲作に関する森林破壊は大きく、平安京等の遷都に伴う住居の木材、築城の木材そして江戸100万都市の住居の木材等森林破壊が進み、江戸時代には尽山になってしまった。山が尽きて、森林が無くなってしまったということである。つまり、江戸時代にはほとんどの山は代償植生ということになり、植林が勧められた。

筒井(1985)は元禄10年に出された宮崎安貞の農業全書を引用し、植林の目的や樹種を述べ、更に農業と植林の関係や屋敷林などを説明している。田や畑の回りに植林すれば、落ち葉は肥料になるということで、里山的な発想である。

武蔵野の雑木林は国木田独歩で有名だが、新田畑作開発と植林ということ言えば、広井(2001)は、元禄7~9年にかけて川越藩が開発事業を実施し、藩主が各戸にコナラ又はクヌギを配り、植林させたという。これらを立証する文献が残っているという。こうして、植林された雑木林は、昭和30年代までの雑木林と同じ様な使われ方をした。つまり、武蔵野の雑木林のほとんどは植林ということである。

藤原(1998)は木製農具の樹種を調べた結果、弥生時代中期までは原植生のカシ、クスノキなどが多く、後期から古墳時代までは代償植生のコナラ、クヌギなどが増える傾向があると述べているが、これが今日的な雑木林、里山の始まりとは考えにくい。今日的な雑木林は定期的な伐採、下草刈りなどの人的干渉があって初めて成り立つ持続群落である。代償植生の遷移の途中に姿を現したクヌギ・コナラ林とていうべきものであろう。

川崎市においての新田開発の記録に、小塚(1980)の享保の頃、海沿い、多摩川沿い、多摩丘陵内に新田が開発されたとある。しかし残念ながらクヌギ、コナラ等の植林の記載はないので言及のしようがない。

沼田(1993)は、徳川時代の焼き畑によって雑木林が

拡大したという、といている。これに対して植林事業を勧めるようになって焼き畑を禁止したという説もあるが、時間の差があるのかも知れないし、沼田と同じ説もある。

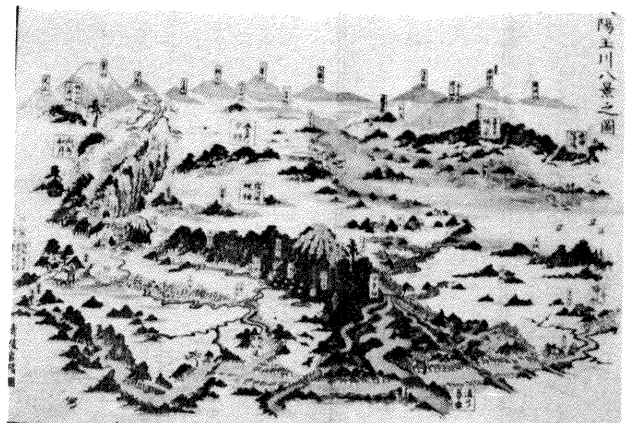
ただ、焼き畑の歴史は長く上山(1987)は縄文時代に焼き畑の雑穀栽培を説いているが、これは科学的根拠がないと考えられる。藤原(1998)は約3500年前の縄文後期の土器からイネのプラント・オパールが発見されていることを報告しているが、水田遺構は発見されておらず、陸稲であり焼き畑によるものであろう。現在でも九州の一部では焼き畑が行われているので、こういう事を考えると沼田の説も否定は出来まい。

以上、江戸時代初期、中期の植生状況をみてきた。川崎、特に生田緑地に関する文献は無くこれらの事から推定せざるを得ない。考えられる事は尽山からの遷移として当地域に現れる雑木林、焼き畑後の雑木林、そして植林としての雑木林が一般的に考えられる。もう一つは、土地が荒れてしまっていることから痩せ地に生育可能な、植物社会学的には競争力の弱いアカマツ林が考えられる。

V. 江戸時代末期から明治時代前期の生田緑地の植生

この期に於ける文献に増淵他(1994)、増淵(1997)がある。新編武蔵野風土記稿、江戸名所図会、陸軍迅速側図などを用いて川崎市、生田緑地などの植生景観を復元したものであり、これによれば、生田緑地は景観的にはマツ林だが、マツの純林を指すのではなくクヌギなどの低木林に高木としてマツが目立つ程度といており、このような植生は明治前期まで認められるとしている。江戸名所図会ではマツは尾根上に描かれていて斜面には植生は描かれていないが、寛政3年刊行、大山街道を往来する人々に販売された「武陽玉川八景之図」(青稜岩精画)にも斜面の植生の描写はない。しかし、「都築ヶ丘夜雨」として、次のような歌が添えられている。{大松に近き都築の夏木立 嵐も時に夜の雨かな} 都築とは現在の横浜市に当たるが、生田緑地もマツが描れている。この歌の夏木立であるが、マツの他の植生があったことを意味している。(歌人・佐野渡の和歌)

ここでいうマツとはアカマツのことだろうが、現在の



武陽玉川八景之図

生田緑地にもアカマツは僅かだが生育している。生育場所は尾根上の痩せ地であり、これは陽樹であることと、競争に弱いことから頷ける。中西他（1985）はアカマツ林とコナラ林の住み分けとして、アカマツは尾根筋にコナラ林は谷筋に土壌の関係から住み分けしているとしており、更に人為的に尾根筋はアカマツ林に田畑の近くの山裾を定期的に伐採し低くし田畑に日の当たりを良くしたという。定期的に伐採していると土壌の良いところではコナラ林に遷移するともいう。

このような事を考えると増淵（1997）のいうクヌギ林などの低木林とか和歌に歌われた夏木立とは定期的に伐採され、薪等に利用されたもので、人為的干渉の元に成立していたものと推定される。

浅野編（1984）よればマツ材の利用は多岐にわたるが、その他の文献によればマツ材は水を通しにくいので橋とか土木工事に使用されたり、松炭は瞬間的に火力が強くなるので刃物の製造に使用されたり、陶磁器の燃料に使用されたりしてきたという。生田緑地のアカマツも何らかの利用のために生育していたのだろうか。植林かまたは土地が痩せたために遷移の途中に現れたものだろうか。当地域の一般的な遷移からみれば、後者は否定的にならざるを得ない。遷移の初期に草本類が優占するような立地では陽性のアカマツは草本類に負けてしまい生育できなくなってしまうからである。尾根筋などでは事情が変わってくるかも知れないが。

この期のまとめとして生田緑地はアカマツを伐採すれば雑木林になる可能性を十分持っており、低木林は雑木林的な役割を果たしていたのかも知れないということが言える。

VI. そして現在まで

大正時代になると本多静六は山を荒しているとアカマツ林ばかりが増え、日本は滅びてしまうという「赤松亡国論」を提唱した。現在でもアカマツ林は多く、植物社会学的にも植林、群集の命名がなされているが、スギ林も多く、植えスギだといわれている。

川崎出身の植物学者・原（1936）は生田緑地を含む地域の植物誌を出しているが、その中で雑木林という言葉



萌芽再生するコナラ

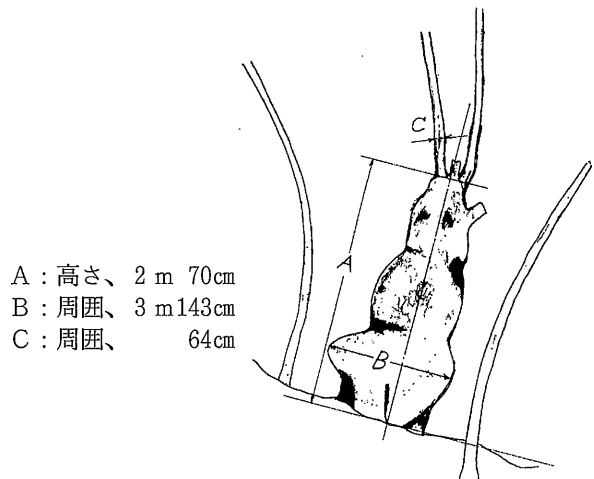
を使用しているのも昭和の初め頃には生田緑地も雑木林だったと考えていい。では何時アカマツは伐採されたのかは明確ではない。コナラやクヌギは根元から伐採されても自己再生できるが、アカマツは枯れてしまうので、アカマツは伐採されれば、雑木林への移行は早い筈である。

生田緑地は昭和16年に都市計画緑地に決定されているので、この後の植生の変化はないと考えられる。生田緑地の雑木林の高さは多摩丘陵の他の雑木林の高さよりかなり高い。これはかなりの期間、伐採されていない事を物語っている。コナラやクヌギの寿命はどの位か明確でないが、川崎市麻生区早野で萌芽再生しないクヌギの枯れた切り株を見たがかなりの太さであった。切り株の中は空洞になっていて年輪を見ることは出来なかったが、立地条件によるのだろうかかなりの寿命であり、生田緑地ではこのような枯れた切り株は見られない。萌芽再生しない枯れた切り株が見られないということは、かなりの期間伐採されていないということと雑木林としては比較的新しいということの意味しているのかも知れない。



クヌギ（切株）麻生区早野 2001.12.1

図1

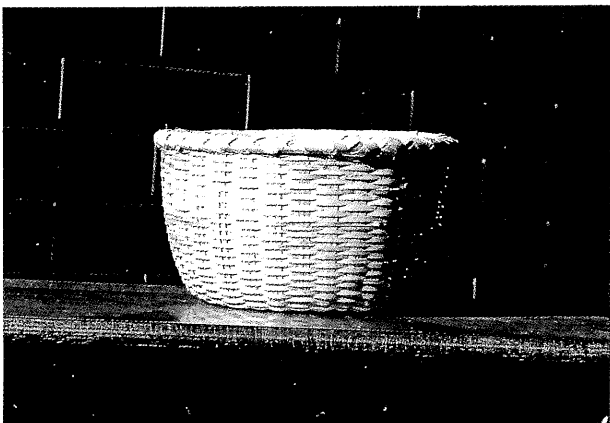


VII. アズマネザサの利用

アズマネザサの分布は関東地方、東北地方から北海道西南部に及ぶという。これは陽性ながら耐陰性に富み又耐寒性にも富むという立地条件の幅の広さを表しているのだろう。

近年、雑木林は薪炭林などとしての役目を終え、下草刈りが行われなためアズマネザサが優占し、下草は陰性の植物に限られ種数も少なくなっている。

かつて、倉本他（1997）によればアズマネザサは目籠に使用されていたという。そこで東北、福島県いわき市入遠野の竹職人に生田緑地のアズマネザサを送ってみた。



生田緑地のアズマネザサで編んだ米とき籠

目的は東北地方でもアズマネザサを用いて籠を作っているのか否かである。結果としてはアズマネザサをシノ（篠）と呼び、かつては養蚕用の籠の材料とし、今でも米とき籠などに利用されているという。シノと言う呼び方は川崎でも同じで、又はシノダケとも川崎でいうというが、東北でもそう呼ぶのかも知れない。

アズマネザサは福島県いわき市では、かつて、土壁の補強材として、本来ならマダケを用いるのだがその代用として使用されていたという。これは恐らくアズマネザサが生育する地域ならどこでも、かつては、利用されていたものと考えられる。

川崎ではアズマネザサを手作り凧の材料とし、又は張り子の虎の骨組みのような使い方を教育現場ではしているようである。篠笛の材料もアズマネザサということである。

尚、矢頭（1976）は平安時代の物語で作者不明の竹取物語を引用し、この物語が作られた頃から竹細工する職人がいたことは明らかであるとしている。

VIII. 炭と雑木林

岸本（1984）によれば、炭が使われたのは弥生時代で水田稲作と無関係ではなく、鉄製農具の鉄を作るために炭が使用されたのが初めである。その後、人間生活の暖房として活用されるようになるが、平安時代の12単衣は住居の寒さを示すもので炭が使われた。江戸時代になって100万都市へ炭が運ばれるようになったが、相模地方

の大沼新田、淵野辺新田、精兵衛新田等の木炭が有名であるとのことだ。ここで気になるのは、新田ということで、武蔵野の雑木林は新田開発と植林が明らかであるが、相模地方の雑木林も新田開発による植林と考えられる。ともかく、暖房としての炭が貴族階級だったものが、庶民階級にまで普及したのは、貨幣経済の発達した江戸時代からであった。

小塚（1980）は江戸時代、川崎から作物、果実、燃料を江戸に運んだとしているが、燃料として木炭は当然考えられ、生田緑地では炭は焼かれなかったと推定されるが、市内の他の地区、例えば黒川などでは炭は焼かれていたようである。

鎌倉時代、生田緑地の枳形山に出城があったことは前述したが、小塚（1980）は今でもおし沼（生田緑地の近く）部落に鍛冶屋さんが多いのは、鎌倉のころから、武器（刀、槍、矢尻など）を作っていたなごりと思われるとしている。武器を作る時には瞬間的に火力が強くなる木炭が必要になるが、それがアカマツである。おし沼の鍛冶屋がアカマツの木炭をどこから調達したのだろうか。明治前期までは生田緑地にもアカマツは生育していた。

IX. 終わりに、なぜ雑木林か

雑木林をそのまま放置すれば、潜在自然植生であるシラカシ林になってしまい、林内はうす暗くじめじめしていて草本数も少なくなってしまう。鎮守の森のようになってしまい、薄気味悪さもあるかも知れない。

これに比較して、雑木林は下草を刈れば林床は明るく、草本数も多く、芽吹き、緑、紅葉、そして落葉と四季折々の変化を見せてくれる。このような観点からか、近年雑木林の保存とか雑木林を守れなどの運動が広がっているようである。

沼田（1993）は目に映った身の回りの環境が被検者にとっていいか、わるいかを評価させる視環境評価法を説明し、雑木林は評価が一番高く、極相林に近い照葉樹林が一番低いといっている。

雑木林は心理的にも最も心の和らぐ林ということであろう。

X. 謝辞

末筆ですが、福島県いわき市入遠野に在住の竹職人、佐川次男氏には川崎市の生田緑地に生育しているアズマネザサで籠を編んで戴き、元校長の菅野明氏にはアズマネザサの学校での利用法などについて教わり、指導主事の佐久間雅彦氏にはインターネットで資料を収集して頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 浅野猪久夫編 (1984) 木材の事典. p.14. 朝倉書店
- 小塚光治 (1976) 川崎史話 上. pp.20-23. 文祥堂
- 小塚光治 (1980) 川崎史話 中. p.132 p.239. 文祥堂
- 小塚光治 (1980) やさしい川崎の歴史. p.62. 教育出版社
- 倉本宣他編 (1997) 雑木林をつくる. p.103 星雲社
- 岸本定吉 (1984) 木炭の博物誌. p.60 p.65. 総合科学出版
- 広井敏男 (2001) 雑木林へようこそ. pp.14-15. p.105
新日本出版社
- 藤原宏志 (1998) 稲作の起源を探る. p.67. pp.128-129.
岩波書店
- 原 松次 (1936) 武州向丘村植物誌. p.26. 山本浩然館
ホームページ. <http://www.yk.rim.or.jp/harujum/recknto/tuzuki/tzhismn.ktml>
- 増淵和夫他 (1994) 絵図による植生景観復元の試み. 川崎市青少年科学館紀要 (5) pp. 1 -23
- 増淵和夫他 (1997) 多摩丘陵における明治前期の植生景観. 川崎市青少年科学館紀要 (8) pp. 1 -24
- 沼田 真 (1993) 植物のくらし人のくらし. pp.227-228. p.231. 海鳴社
- 中西哲他 (1985) 日本の植生図鑑「Ⅱ」人里・草原. pp. 30-33. 保育社
- 鈴木秀夫 (1989) 森林の思考・砂漠の思考. p.100-101. 日本放送出版会
- 筒井迪夫 (1985) 木と森の文化史. pp.202-203. 朝日新聞社
- 只木良也 (1987) 森の文化史. pp.34-35. 講談社
- 上山春平 (1987) 照葉樹林文化. p.16. 中央公論社